

# ひびき

教育目標：「なかよく かしく たくましく」

三本柱：さわやか挨拶 聞き方・話し方名人 いきいき運動

多治見市立共栄小学校 R元. 6. 28

## 【「不便＝不幸」ではないことを学ぶ貴重な体験】

校長 宮地敏彦

6月13～14日、5年生が地球村の豊かな自然の中で宿泊研修を行いました。夕食のカレー作りでは飯ごう炊飯を行い、野菜を切ったり米をといだり、マッチで火をつけることさえない子たちが、煙に目を細めながら薪の炎を調節したりしました。研修の2日間は、家での生活とくらべると不自由なことだらけで、快適でもありません。でも、子ども達の顔はいきいきと輝いていました。



『今の子どもは魚を切り身でしか見ないから、本当の魚を知らない。』と言われますが、実際、魚釣りをする子どもは少なくなりました。ショッピングセンターに行けば、ほしいものは何でも手に入ります。また、スマホやインターネットを使えば、一步も動かなくても遊び（ゲーム）も買い物もできてしまいます。何をすることもスイッチ一つでOK。日本の“物の豊かさ”や“生活の便利さ”は、世界の17%に満たない先進国の中でもトップクラスです。しかしそれらを得た代わりに、心・頭・体が本来もち得る力や“野生”を失いつつある現状に不安と危機感を感じます。

例えば、私が子どもの頃、電話は家庭の固定電話しかなく、友だちに電話をかけるときは、相手の家のことも考え、「かける時間はいつがいいか」「先方の親が出たらどんな言葉を使おうか」「友だちが不在のときにはどうしようか」などと心をつかっていたものです。また、家に自家用車はなく、時間や体調に関わらず移動は徒歩か自転車でした。ゲームを楽しむときもカードやボードゲームなので、遊ぶ時間をみんなで決めて誰かの家に集まりました。外遊びでは、みんなが楽しめるようにルールも自分たちで考えていました。どんな遊びでも、顔を合わせて言葉を交わすことが遊びの必要条件でした。そうした経験を経て培われた力は大きかったと、大人になった今実感しています。私よりも年配の方々にはさらに強く感じておられることでしょう。

## 【途上国に学ぶ ～本当の豊かさ・賢さ・幸せとは？～】

私はガダルカナル島のあるソロモン諸島国（南太平洋上にある途上国）に2年間住んでいた時、生活習慣や様々な価値観の違いに驚きながらも、多くのことを学ぶことができました。その中の2つのエピソードを紹介させていただきます。



ある日、学校の運動場近くに住んでいる3歳の子がブッシュナイフ（刃長30cm）を持って立っていました。刃物など危ないから持たせないようにするのが日本の常識ですが、枝打ち・草刈り・捕獲・調理等にナイフを使う国ではあたりまえのことでした。生きるすべを早く正しく身に付けさせるために、小さい頃から道具の大切さとともに恐ろしさもしっかり学んで使いこなせるようにします。自分が担任するクラス（中学生）のピクニックで海に行くと、生徒たちは木枝で火をおこし、その場で魚をさばき、ヤシの葉で器をこしらえ、バナナの葉でごちそうを置く所をつくります。「危険だから…」と遠ざけてはいるこのたくましさは育ちません。

もう一つのエピソードです。学校に行けない子達への青少年教育のひとつとして、国初めてのラジオドラマを生徒や同僚の先生に協力してもらって作り、国営放送局から半年間放送しました。番組のヒットに気をよくして、『次はテレビですね。』と、支援してくれた放送局のスタッフに言ったところ、『いや、テレビはいらない。今、みんな海や夕焼けを見ながら外で話をしているが、テレビが入ってきたらみんな家の中に入ってしまい、この平和な姿がなくなってしまう。』と言われました。日本のような物質的な豊かさが幸せだという、自分の思い上がりを指摘されたようで、恥ずかしい気持ちになると同時に、自国の平和や人々の幸せを願う気持ちは日本よりもこの国の人々の方が強いと感じました。そして、物はなくても明るい挨拶と笑顔を絶やさない現地の人々と生活し、本当の“豊かさ”や“賢さ”、“幸せ”について考えさせられました。私たちは今まさに、年齢やねらいに応じて便利さを活用したり、遠ざけたりしてコントロールする力を育てなければいけない時代にあると思いますが、いかがでしょうか。